

【暗証聖句】

イザヤ書 14 章 12 節「ああ、お前は天から落ちた。明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされた。もろもろの国を倒した者よ。」

【日・愛の表現としての創造】

この世界は神様が創造してくださいました。それゆえ、いたるところに神様の御手の業、神様の栄光を見ることができます。もともと神様が創造された世界は、すべて良いで満ちていました。ところが、実際には良いものと、悪いものが混在している世界になっています。たとえば、バラは美しい花を咲かせますが、同時に痛みを与えとげを持っています。また、イエス様はたとえ話の中で僕が主人に、「だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか」と尋ねる場面があります。神様は毒麦も創造されたのでしょうか。もちろんそうではありません。主人は僕にこう答えます。「敵の仕業だ」(マタイ 13:28)。敵、すなわちサタンによってこの完全な世界に罪が侵入してしまったのです。

創造主なる神様は愛の神様です。神様は愛を表現する場としてこの宇宙を、そしてこの地球を創造されました。神様のすべての被造物が愛を分かち合うために、この世界を神様は創造してくださいました。神様の愛は永遠に変わることはありません。そのことを考えれば、愛とは正反対の罪を神様が創造されるはずはありません。逆に、神様の愛を壊す罪をもたらしたサタンが存在しているという事実が、この世界に混在している「とげ」を見ることで、浮き彫りになったのです。

【月・愛の基礎としての自由意志】

神様は人間に自由意志を与えられました。自由意志とは、他からの強制や拘束、妨害などを受けないで、行動や選択を自発的に決定することができる意志のことを言います。神様はこの自由意志により、私たち被造物が神様の愛の中に生き、成長していくことを望まれたのです。機械的に愛するのではなく、心から、真実の愛をもって愛し合う世界を作り上げたかったのです。愛さないという選択が可能な中で、愛を選ぶからこそ、その愛には価値があり、愛を選ぶことを通して品性が啓発され、私たちはみな豊かに成長することができるように、神様はご計画されたのです。

しかし、自由意志は間違った選択をする可能性がありました。天におけるルシファーの反逆はその最初の実例でした。そして、天使の3分の1も同様に間違った選択をし、地の落とされたのであります。人間が生きていくために創造されたこの地上に、なぜ神様はサタンと墮天使を投げ落とされたのでしょうか。自由意志を利用してサタンが人間を誘惑してくることは容易に想像することができたことでしょうか。罪の根本的な責任を問うならば、それは自由意志を与えられた神様、サタンを地上に投げ落とされた神様にあるのではないかという思いが生まれてもおかしくはありません。

この問題は非常に難しく、私たちには答えを出すことができません。私たちには神様がなさることのすべての理由が開示されているわけではありません。だから、いま分かっていること以上のことを議論するよりは、いま確かに分かっていることに目を向け、その範囲で理解するしかありません。ただ、サタンの誘惑により人間の自由意志が間違った方向に使われたとき、そのすべての責任をイエス様が負われ、命をもって贖われました。そして、最終的に神様は悪を完全に滅ぼされる時が来ます。この地上にもたらされた罪は、それをもたらしたものと共に一掃されるときが来るのです。

【火・神秘的な忘恩】

エゼキエル 28 章 12 節から 19 節にかけて、サタンの心に罪が芽生える光景が描かれています。これはフェニキアの首都ティルス王が、その富と力のゆえに傲慢となり、自分を神だと暴言を吐くようになったとき、その愚かさを断罪する中で、同じ心がサタンにも見られたのだと主は語ったのでした。ティルスは、紀元前 1000 年頃には、フェニキア人が作った都市の中でも最も発展し、アレクサンダー大王に対して唯一抵抗したり、植民都市としてカルタゴを建設したりしたことで知られています。その王が自分の力のゆえに傲慢になり、自分を神のごとくに思っていました。このような思いはすべてサタンの精神と同じなのです。エゼキエル書 28 章 12~17 節

「お前は神の園であるエデンにいた。あらゆる宝石がお前を包んでいた・・・わたしはお前を翼を広げて覆うケルブとして造った。お前は神の聖なる山にいて火の石の間を歩いていた。お前が創造された日からお前の歩みは無垢であったが、ついに不正がお前の中に見いだされるようになった・・・お前の心は美しさのゆえに高慢となり、栄華のゆえに知恵を墮落させた。わたしはお前を地の上に投げ落とし、王たちの前で見せ物とした。」

この聖句を見ると、サタンは非常に美しく、罪のない無垢な存在として創造されたことがわかります。しかし、その美しさのゆえに高慢となり、栄華のために知恵を墮落させたと書かれています。美しさや栄華、知恵など様々な能力、それらは神様の栄光を表すために与えられたものです。正しく用いるなら、より豊かに用いられるようになります。ところが、そこに罪の誘惑が潜んでいるのです。神様の栄光のためではなく、自分の栄光のために用いられるようになってしまう誘惑です。そして、人からの賞賛を得たいという誘惑。罪はこのようなところから始まるのです。サタンのこのような心は、大なり小なり、私たち

だれの心の中にも潜んでいるものではないでしょうか。

しかし、なぜサタンは美しく輝き、天国で最高の地位にいた天使であるにもかかわらず、さらに上に立ちたい、イエス様よりも上になりたいなどと考えたのでしょうか。罪の起源、それは神秘であり、簡単に説明できるものではありません。このことに関してエレン・G・ホワイトが語っている次の言葉が参考になるでしょう。

「罪は神秘的で説明できないものです。その存在に理由はないのであり、それを説明しようとすることは、罪に理由を与えようとすることであり、罪を正当化することになるのです。罪は完全な宇宙に出現した弁解できないものなのです」(天使についての真実 P30)

【水・高慢の対価】

ティルス王と同様に、バビロンの王も高慢なものでした。ユダ王国を滅亡させ、民を捕囚とした国の王は、やはり自分を神のごとくに思うようになりました。そんなバビロンもやがて滅ぼされるときがきます。イザヤ 14 章では、このバビロンの王の墮落とサタンの墮落を重ねて描いています。イザヤ書 14 章 11 節で「お前の高ぶりは、琴の響きと共に陰府に落ちた。蛆がお前の下に寝床となり、虫がお前を覆う」と、主はバビロンの王に語ります。そしてその後続いて、「ああ、お前は天から落ちた。明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされた。もろもろの国を倒した者よ。」(イザヤ書 14 章 12 節)とサタンの描写になるのです。地に投げ落とされた理由、それは「わたしは天に上り、王座を神の星よりも高く据え、神々の集う北の果ての山に座し、雲の頂に登って、いと高き者のようになろう」(イザヤ書 14 章 14 節)と思ったからでした。高慢な心は必ず裁かれます。それはサタンの心と同じだからです。これに対して神様は謙遜なのです。謙遜に生きる人は、神様の心を生きていると同じです。そして、自分を低くするものを、主は高く引き上げてくださるのです。

「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」ルカ 18:14

【木・不信の拡大】

サタンの心は、天において広がっていきました。黙示録 12 章 4 節を見ると、「竜の尾は、天の星の三分の一を掃き寄せて、地上に投げつけた」とあり、実に天使の三分の一が墮落してしまったことがわかります。いかに罪の影響力が大きいか分かります。天に罪が発生し、サタンが他の天使を自分の陣営に引き込んだとき、ついに天で戦いが起こります。

黙示録 12 章 7～9 節「さて、天で戦いが起こった。ミカエルとその使いたちが、竜に戦いを挑んだのである。竜とその使いたちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた。」

罪は単なる思想、自由意志の誤用に終わるものではなく、天においてイエス様と聖天使たちとの間に激しい戦いを引き起こすほどのものだったのです。なぜ、私たちが罪と闘わなければならないかがわかることでしょうか。しかし、重要なのは、この戦いにおいて、サタンは勝てなかったと言うことです。勝てなかった彼らが、天に居場所を失い、地上に落とされたことは問題なのですが、勝負はすでに決まっていることはしっかりと押さえておきたいところです。

ところで、いつのころサタンに罪が芽生え、どのようにそれが膨らみ、他の天使たちを引き込んでいくにどれほどの時間を要したかまでは詳しくわかりません。一つ分かることは、戦いが起こるまでの間、神様は忍耐されていたということです。「神様は大いなる憐みをもって長い間ルシファーに対して忍耐された。彼は最初不満の念にかられた時も、あるいは忠誠な天使たちの前で虚偽の主張を始めた時でさえ、その高い地位からすぐに追い出されるようなことはなかった。彼は長い間、天にとどまっていた。何度も何度も彼には悔い改めと服従の条件のもとに赦しが提供された」(各時代の争闘下 P 232)